

御坊さん

文明の罫

煩悩愚僧

文明の罫は既に張り巡らされた。そして、人はその罫の中でしか生息できない家畜となった。

今時、人の誕生は遺伝子の如何によって許可される。ゆりかごから墓場まで手厚い医療と福祉制度の下に管理され、脳死判定により、身は死体とされ、合法的に部品としてリユースされる。この文明の凄まじさは「生」と「死」を分断し、今までとは比較にならない精度で個々の「生」の資質を管理し始めたことである。やがて、このテクノロジは、「いのち」を市場経済に組み込みながら、高度に管理された商品化を押し進めて行くに違いない。

文明は、人間の欲求を充たすという餌と引き替えに、人間を徹底した管理の下におく。人はこのシステムのなかで、自分にとっての苦痛や不快は出来るだけ避け、自分にとって快適で都合のいいことだけを選択する文化に否応なく慣らされていく。そこでは、困難なことに正面から向かい合うことによって、苦悩しながら自分を脱皮し、常に新しい自分につくりかえていくという喜び、つまり、本来の「いのち」の躍動する機会を止めども奪って行く。

文明社会(娑婆)の洗脳は見事である。教育によつ

年刊 『御坊さん』 第4号

平成 12年 8月

発行 亀山本徳寺・本徳寺廟所墓地管理部

姫路市亀山三三四・35-0242

編集 真宗文化研究室・責任者 大谷昭仁

て知らぬ間に、画一的な知識と社会の規範を身につけ有り難くもピントのはずれた「人権券」をもらって、手軽な自分を手に入れる。その結果、自分のスタイルと健康に驚くほど腐心する。この罫の中で、偶のこ褒美に、家族のために日々を消耗して、束の間の生き



甲斐に浸ることが出来る。時には、他者や社会のために己の使命を自覚し、自分の存在に熱中できる特典もある。不幸にして他者との関係を築くことに失敗した者は、自分の世界に閉じこもり、孤立した頭脳は自分だけの絶対神を妄想する。このように文明社会はあらゆるニーズに応えるべく準備万端を整えている。

そこにいかなる危険と惨劇が潜んでいるようにも、こ

のシステムは淡々と稼働し、「死」をひたすら隠蔽し、出来合いのアイデンティティなる甘美な「生」をちらつかせながら、ひたすら個性的に生きる主体的な個人を賛美する。おまけに、一人静かに戦場に赴く「男の美学」すらそこにはセットされている。こんな舞台の上で自分を演じつつ、時折、足下に姿を見せる底知れぬ暗闇を気にしながら、人は「いのち」を渴望しつつ「確実」に「いのち」を見失っていく。

もはや、現代は「いのち」の躍動がどれだけ素晴らしきことであるかを知る人は少ない。人は、文明社会という黄金の牢獄の中で飼育され、「いのち」をすりつぶし、生きながら死んでいくのだらう。死臭が世界を覆い、度ぎつい香水がそこかしこにまき散らされる。そのような悲惨に微かに気づくことがあってもその原因を探ろうとする囚人はいない。

この自縛の業が生み出す地獄の真っ直中で、如来の「願い」は成就されていた。私の意識が、文明の罫に気づき、分かちがたい一体の「生死」を取戻して、その全てを内包した「いのち」に目覚めたとき、はじめて、南無阿彌陀仏のおゆるれを聞かせていた。噛んで含めた宗祖のお手紙が拝聴できる。

私の頑強な文明社会での洗脳が溶解する瞬間である。御本願の真意は分からずとも、少なくとも私の最期の引き受け役であることを示さんがために、南無阿彌陀仏のお名号となって名乗りで下さったことを。法体から流れ出たお名号が、このお姿を整えられ、「私」の前にお立ちになる。心配しなくてもいい。文明社会の業と必然的に生ずる自己の業を誤魔化すことなく、しっかりと受け止めて、自分の足で行けとおっしゃる。どこまでも一緒に下るよつだ。